出会いは世界を広げていく

交流会を通して

第13回

土肥いつき DOHI ITSUKI
京都の公立高校教員。24時間一人パレード状態のトランス女性。趣味の交流会運営で右往左往する日々を送っている。

交流会人生のはじまり

前号では、わたしの勤務校の社研での話しあいのひとコマを紹介しました。社研の活動は、単にそれぞれがそれぞれのできごとを語りあうだけではありませんでした。例えば、わたしのクラスにいた在日コリアン生徒Sさんが、社研の活動を通して本名を名のることを決意したということもありました。Sさんの決意は、社研で一緒に活動する生徒や他校の在日コリアン生徒のCさんなど、さまざまな仲間との出会いの中で生まれたものでした。わたしがやったことは、社研という「場」を通した出会いをコーディネートしたことだけでした。そのかかわりは、前々号(2月号)で書いたNさんへの「本名を名のらせる」かかわりとはまったく異なるものでした。Sさんの姿から学んだことは、マイノリティ生徒はピアな存在と出会うことでアイデンティティを獲得し直していくということでした。

1993年、H高校の教員から自校の朝鮮文化研究会（以下、朝文研）と社研の交流をしたいという連絡がありました。私はふたつ返事でOKして、さらに、Sさんの本名宣言のきっかけになったCさんにも声をかけ、2校＋ひとりの合同交流会を開催しました。この合同交流会がきっかけとなって、京都在日外国人生徒交流会（以下、在日交流会）ができました。在日交流会には、それ以降、社研や朝文研がない学校からも参加してくれるようになりました。参加者のエスニシティは、コリアンや中国、あるいはモンゴルやボリビア、さらにはロシアなど多岐にわたります。また、日本人とのダブルの生徒も来ます。さらに、各地でとりくまれている交流会が集まる「全国在日外国人生徒交流会（以下、ゼンコー）」に参加したりもしています。

一方、私の勤務校に在日外国人はそれなりに在籍していますが、みんながみんな社研に参加してくれるわけではありません。せっかく在日交流会を立ちあげたのに、自分自身が生徒をつれていけない状態が続きました。ある時、他校の引率教員に「主催者が自校の生徒をつれていけなくてもうしわけない。交流会をやる資格はない」という主旨のグチを言いました。すると、みんなは「この交流会の存在が貴重なんだ。だから続けてくれるだけでいい」と言ってくれました。その言葉を支えに、今も在日交流会の活動を続けています。

さらに、高校を卒業してしまうと、意外と居場所がなくなります。そこで、2009年に、ゼンコーの卒業生と一緒に「卒業生の会」を立ちあげました。卒業生の会のメンバーは、毎年開催されるゼンコーの運営にもかかわってくれています。

1997年、私は自分がトランスジェンダーであることを知り、1999年頃から性別移行をはじめました。2004年にたまたまNHKの番組に出たことをきっかけに、他府県のトランスジェンダーの高校生から相談メールが来るようになりました。その時、「在日外国人生徒のための交流会をしている自分が、自分の後輩たちのための交流会をつくらなくてどうする」と思いました。そして、2006年にようやく5人のトランスジェンダーの高校生・専門学校生を集めた交流の場を持つことができました。当日のプログラムは、在日交流会と同じく「昼ごはんをつくる」、「昼ごはんを食べる」、「自己紹介をする」でした。交流会が終わって、そのままみんなで焼肉を食べに行き、カラオケに行き、解散の時に「どうする？　これからもこんな交流会やりたい？」とたずねました。すると、全員が「やりたい」と即答しました。そこで年に4回交流会を開催することをその場で決めました。これがトランスジェンダー生徒交流会（以下、交流会）のはじまりです。

当日の参加者の感想を紹介します。

めちゃくちゃ緊張した分、あまりにも自由であっけにとられた、皆料理夢中やし、いつきさんはビール飲んでるし（笑）。初めて多くの同じ人に出会えて、しかも話できて、あん時はホンマに新たな一歩を踏み出した気がした。話し聞いて理解してくれた時にうれしくて必死で涙堪えてたりしたよ。恥ずかしい話ですが（笑）。

この時から18年間、交流会を続けています。次号には、交流会のその後について書くことにします。